

第2回サンティアゴ巡礼 (今回はログローニョまで) 【下】

(2018年5月3日～5月6日)

5月3日 (木)

七時、マニェルーのアルベルゲを出発。アナスタジアはまだ出発していなかった。でも私は歩くのが遅いからそのうち追い越されるだろうと思っていた。

7:40 シラウキの村に着く。坂の多い村である。小さな店があり、カフェ・コン・レチェとクロワッサンで休憩する。カフェ・コン・レチェは自販機で、と言われるが操作の方法がよくわからず結局店のおじさんに頼んで出してもらった。クロワッサンは大概パリッとしているものだがそのクロワッサンはしっとりしていた。バターで揚げたのかと思うくらいバターをたっぷり含んでいた。



花咲き乱れる美しい道・・・



突然出現した道端ミュージアム

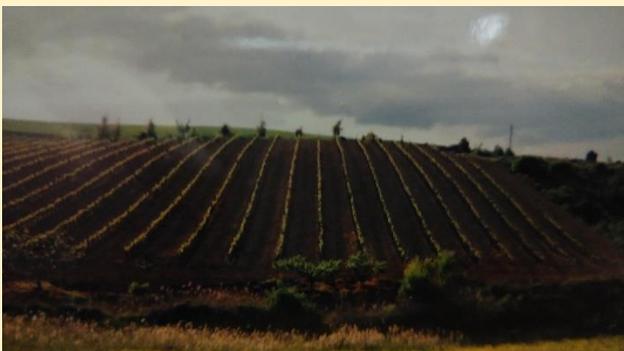


鯉のぼりだっ！！



カタツムリの殻をぶら下げたオブジェ

十時ごろロルカという村を通る。そのあと道に「ロルカの Canal」という標識があつて頭上を水道橋のようなものが走っていた。通りすぎた人に「ロルカの Canal」ってあれのことか？と尋ねてみたがわからないようだった。



ブドウ畑です。



デコレイトされた十字架



お店の広告ポスターとしてこういうのをよく見る。

ヴィジャトゥエルタの町が見えてきた。

十一時過ぎ、待望のヴィジャトゥエルタに到着。ここのアルベルゲにどうしても泊まりたかったのだ。

綺麗な町だったがなぜか二年前の記憶と全く違っていた。しかし日本ならともかくこちらの町の様子が二年やそこらで大きく変わるわけではないから全く私の記憶違いであろう。別の町の記憶と混同していたのだと思う。でも道の途中にアルベルゲの広告が貼ってあった。「Casa de Magica」というアルベルゲの広告で、◎二段ベッドではない！◎シャワーや洗濯の設備も万全 ◎美味しい食事を提供、などうたっていた。写真もついていて、これはもう間違いなく私が二年前に泊ったあのアルベルゲだと思った。こういう広告はこの国にも時々あるが日本に比べたらはるかに少ない。そしてやがてめざす「Casa de Magica」に着いた。進行方向に向かって右側に入る道のところにまた広告が貼ってあった。

そこからは全く記憶通りであった。

なんだかもう開いているのかいないのかよくわからなかったが人を呼んで尋ねてみると受付は十二時からだということで近くで食事でもしながら待つことにした。近くの、といっても元来た道を100mくらい戻ったところにあった店に入る。飲食店には違いないがバールというにはちょっと雰囲気が違う。なんだか店内でも食べられる小売店、という感じでパンや菓子やスナック、飲料、果物少々くらいを売っている。コーヒーやサンドイッチは作ってくれるがそれ以上手のかかったメニューはない。さっきのバターたっぷりクロワッサンの店もそんな感じでしかももっと狭かった。バールとはどういうものかという正確な定義があるのかどうかわからないが、それぞれが自分の出来る範囲で営業をしているといったらいいのかもしれない。スーパーや普通の食料品店は午後の前半は長い休み時間で閉まってしまうがこういう飲食店は明るい間中やってくれているので助かる。日没するのは夏なら午後十時、真冬でも七時ごろだからこの表現はほぼ正確だ。

座席数は二十人分くらいだった。私はそこでサンドイッチとオレンジジュースを頼んだ。サンドイッチといっても店によってそれぞれ本当に違う。そこでは食パン二枚のあいだにハムとチーズを挟んで焼いたクロックムッシュ状のものにナイフとフォークが添えられてきた。オレンジジュースは瓶に入っているのを開けてコップに移したものであった。

さて十二時になりさっきのアルベルゲに向かう。私は本日より一番乗りの客である。予約があ

るか？と尋ねられ、ない、と答えたが泊るのには差し支えなかった。しかし宿泊費が14€でディナーが13€だって？随分値上げしたものである。二年前は宿泊が10€、ディナーが12€だった。が、まあ仕方がない、人気沸騰中なんだろう

案内された部屋は二年前の時とは違って五人部屋であった。前の時は四人部屋だったが、よく考えてみれば陰にもう一つベッドがあったような気もする。古風なクローゼットとかがあってロマンティックな感じだった。でも今度の部屋はベッドと小さい台（スマホのチャージとかに使える）があるだけで殺風景な感じだった。値段は上がったのに損をしたような気分になったがヒーターがしっかり作動していたのでこれはいいな、と思った。

シャワー室も洗濯機も普通にあったが私は前日マニエールのアルベルグでシャワーを使っていたし、今日は大して歩いていなくてそんなに汚れている気もしなかったのでシャワーは浴びなくていいやと思った。個室の部屋についているシャワーだったら是非浴びただろうが、やはり日本人にとってはトイレの一室のようなああいうシャワールームは積極的に使いたいものではない。そして洗濯は靴下だけでなくTシャツもレギンスも手洗した。私より先に来た人はいないので洗濯機の順番待ちはしなくていいわけだが機械で洗うと無駄に時間がかかるし値段だって多分3€はするし大した量でもないのに勿体ない。しかし手絞りの洗濯物もフェイスタオルでくるんで脱水しヒーターの上に掛けておいたらガンガン乾いた。

私より一時間くらい後から別の宿泊客の人たちが次々と訪れて、ヒーターを一人で占領してはいけないなと思い始めたがそのころにはもう私の洗濯物は八割がた乾いていたので次の人がシャワーを終えて干しものをしようと思う頃には少しずつ自分のものを取り外して「どうぞここを使ってください」と明け渡すことができるようになった。

午後三時ころには私のいる部屋のベッドは全て埋まった。ドアから入って左側の壁にヒーターがついていたので私は一番左側に設置されたベッドに陣取っていたがそのベッドと平行に並ぶベッドが他に三台あり、もう一台のベッドはドアから入ってすぐ右側に横向きに置かれていた。

私の次にやってきたのはオランダ人のサンドラで、次に入ったのはイングランド人のアリスである。因みにイギリスに住んでいる人たちは自分のことをイギリス人とは言わない。そもそも「イギリス」は日本語だ。それに該当する国名はグレート・ブリテンかな？でも彼らはグレート・ブリテン人とも名乗らない。イングランド人とかスコットランド人とかウェールズ人などと言うようである。で、そのアリスはドアを入れてすぐ右側にあるベッドを選んだ。やはり電車内の座席も部屋のベッドも端から埋まっていくものなのだ。そしてその次に入ってきたデンマーク人のブリギットはサンドラの隣、ブリギットとほとんど同時に入ってきたデボラはアメリカのシアトルから来た人で、私とブリギットの間にいった。

ところでもう一つ気づいたことがある。アメリカから来た人は自分の出身地のことをUSAということはあまりないようだ。シアトルとかサンフランシスコとかの都市名、あるいは州の名で言うようである。USAはあまりに広いので一つの同じ国という感じが強くな

いのかもしれない。

さて皆、出身国はまちまちだがそろって英語が堪能なので話がはずみ、女子会状態になる。年齢は40～50代だろうか？よくわからないが私が最年長である可能性は高い。しかし私のみ英語が堪能とは言い難く、カタコトでようやく意思疎通ができる状態なのでどうしてもみそっかす的になる。それでもみんな私が一生懸命喋っているとちゃんと注目して一生懸命聞いてくれる。有難いことである。精一杯頑張らねばという気持ちになる。

しかしちょっと時間がありすぎた。一人でぼーっとしているのは何ともないが他の人がいるとちょっと辛い。なめらかな会話ができないので間が持たない気がするのだ。

「ああ、今日は時間がいっぱいあるなあ…。」

と言ったら

「家では忙しいの？」

と聞かれた。

「そう、忙しいのよ。」

と、その程度の会話をする。

それから私がいつも不思議に思っていることがあった。スペインやフランスでは緯度はそう高くないのに日の出日の入りの時間が遅い。五月ならば日本では朝の五時にはすっかり明るくて夕方七時にはもう殆ど暗くなってしまっているのにフランスやスペインでは朝は七時頃ようやく明るくなり夜は十時頃まで暗くならない。私はいつもそのことを話題に上げているのだが、相手の言うことが半分くらいしかわからないので歯がゆい思いをしている。その時も私は隣のベッドにいたデボラにアメリカではどうなのか？と尋ねてみた。デボラはスマホで各地の日の出日の入りの時刻を調べてくれた。それを見るとアメリカ各地ではその時期の日の出日の入りの時刻は西欧よりも日本のそれに近い感じだった。多くの人が日本は東にあるから日の出も日の入りも早いというようなことを言うのだが、それだけだろうか？それだけでは説明しきれない感じがした。

ところでこの話はその後日本に戻って一か月くらいしてから理由がわかった。誰かがはっきり説明してくれたわけではない。ネットで世界各地の時間について調べていたら偶然にわかったのである。何のことはない、とても単純な話だった。ヨーロッパではスペインもフランスもドイツもイタリアもハンガリーも・・・というようになかなか広い範囲で時差がなかったのである。イギリスとそれらの国々との間には時差が一時間あるのだがスペインとギリシャやハンガリーは東西に大きく離れていて二、三時間の時差があっても不思議ではないのに全く時差がつけられていない。だから当然西方にある国の方が太陽の巡ってくる時間が遅くなる。そういうことだったのだ。このことは今までだれも教えてくれたことがなかった。

さて皆はほとんどが夕方外に出て散歩や日光浴などをしていたようであった。私も「太陽が出ているから外にでようよ」と誘ってもらったのだが「寒いからこっちの方がいい」と言ってベッドの上でいた。なんてひ弱な人かと思われたであろうが私は軽量化のためあまり

衣類を持ってこなかった。そうでなくても欧米人は寒さに強い。筋肉が多いのだと思う。そして日光が大好きだ。日本人は日光量にはまずまず恵まれているのでそう熱心に日光浴をしようとは思わない。それでも私は一度だけちょっと玄関ホールあたりまで出てみたが「やっぱり寒いや。身体を冷やすと体力が落ちる・・・」と部屋に戻ってしまった。

夕方、かなりお腹もすいて食事を待つのが辛かった。食料もあまり持っている重いので初めからあまり持っていなかったし残ってしまわないように早めの消費を心がけていたから。そしてやっと七時半、待ちに待ったディナーである。大きなテーブルだったので同室の人たちの他に二人くらいの女性が一緒だった。男性客もいたのだが同じテーブルにいなかったのは多分部屋が男女別だったからだと思う。これは珍しいことである。アルベルゲでは部屋を男女別にするなどという贅沢は普通できないのである。で、そのうち一人はフランス人でパトリシアと名乗った。他の一人は名前を聞いたかもしれないが忘れてしまった。パトリシアは四十歳くらいか？テレビのアナウンサーのような落ち着いた雰囲気美人で英語、フランス語の他にスペイン語にも堪能なようであった。

パトリック、パトリシアの名前はアイルランド系だということを聞いたことがあったので尋ねてみるとそうだということであった。「アイルランドに行ったことがあるのか？」と聞かれたので「いえいえ、本で読んで知っていただけです。」と答えた。



左からブリギット、デボラ、パトリシア、アリス、サンドラ。



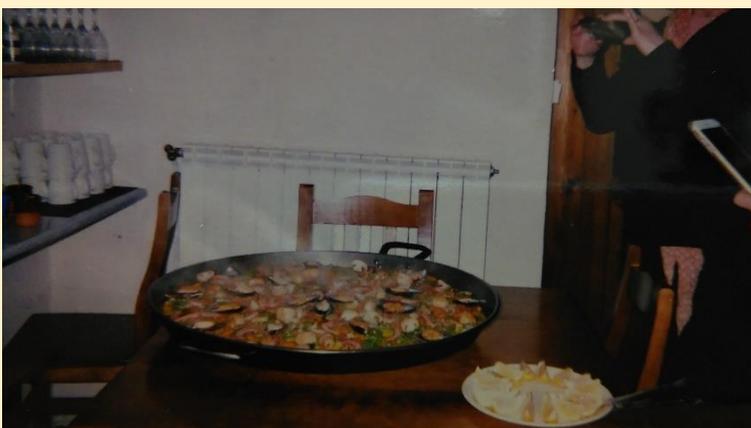
左からパトリシア、アリス、サンドラ、私、ブリギット。



スペイン語の「カサ デ マヒカ」は英訳すると「マジック ハウス」です。

前菜はエンサラダ・ミクスタであった。これはどこで出ても皆同じ姿をしている。レタス、トマト、ホワイトアスパラガス、オリーブがのっけていて、オリーブオイルとビネガーと塩コショウで食べることになっている。この時のはしょっぱすぎたりしなくておいしかった。量的にも完食が可能だった。とうとう食べられた！と嬉しかったのは達成感のせいでもあるがなかなか野菜を食べる機会がなくて飢えていたのだ。

それからメインは本物のパエージャ（パエリア）であった！最近この店の名物になっているらしい。パエージャは前回他のところで二度ほど食べたが「残りご飯で作ったリゾット」みたいな感じで、これが本場のパエージャであろうか？といぶかしく思っていた。どうやら当たりはずれがあるようだ。しかしこのものは間違いなく本物だった。多種の野菜や魚介類を合わせて大きなパエージャ鍋で炊き込まれて運ばれてきた。皆歓声を上げた。そして順々によそってもらって食べた。とても美味しかったが残念ながら多すぎて残さなくてはならなかった。



狂喜乱舞の本格的パエージャ

デザートについては警戒していた。前回ここに泊った時に出たデザートが、クレマカタラ

ーナであろうか、とてつもなく甘くて、一口食べたらウエ〜という感じで私にはとても無理だったので「ごめんなさい、食べられません。」と言わざるをえなかったのである。シェフはがっかりしていた。それで私はあらかじめ周囲のメンバーに「もし甘すぎて食べられなかったらお願いします。」と頼んでおいた。

そうしたらなんと今回もまた前と同じものが出た。一応ちょっとだけ味見をしてみたがやっぱり無理だったので、皆様お願いします、食べて下さい、と言ったら皆は私がなぜ食べられないのかなかなか理解できない様子であった。美容面を気にして食べないのかと思ったらしく「これは砂糖が多いんじゃなくてミルクやクリームで出来ているのよ。」とか言うてくる。いやいや、材料がどうのこうのじゃなくて私の味覚がこの甘さに耐えられないのだということなどをなんとかわかってもらえたのかどうか・・・、ともかくも私以外の六人で分けて食べていただいた。(砂糖だって多いに決まってるだろ?)

さて明日はエステージャまでタクシーで行き、そこからバスでログローニョまで行くことにした。バスはエステージャからでないといけないということで。そして明後日の朝ログローニョの鉄道駅から列車でマドリードに向かう予定なのである。

朝食は七時からだという。必要な人だけ別料金でいただくのだが、時間はたっぷりあるので食べてから行くことにする。バスはエステージャを十一時に出るそうだ。タクシーを呼んでもらうのは九時か十時でいいわけだ。しかしその後考えた。何もエステージャまでタクシーに乗ることはないではないか。たった3kmほどなのだ。歩いたって充分間に合う。タクシーを呼んでもらうのは取りやめにした。

ところで部屋で一人の時に私は現在の残金の確認をした。404€と60セントであった。初め600€ほどあったので、200€くらい使ったことになる。

5月4日(金)

同室の人たちは皆朝七時頃出発した。私は少し遅くても大丈夫なので朝食を食べに行く。パトリアともう一人、昨晚同じテーブルにいた人も一緒だった。サンフランシスコから来たと言っていた。名前はやはり思い出せない。メニューはトーストとジャム、バターとカフェ・コン・レチェとマンゴージュースで2.9€。もっと豪華なメニューもあったようだがそんなには食べられない。飲み物が両方ともかなり量が多かった。ジュースは残し、カフェ・コン・レチェをタッパーに入れた。

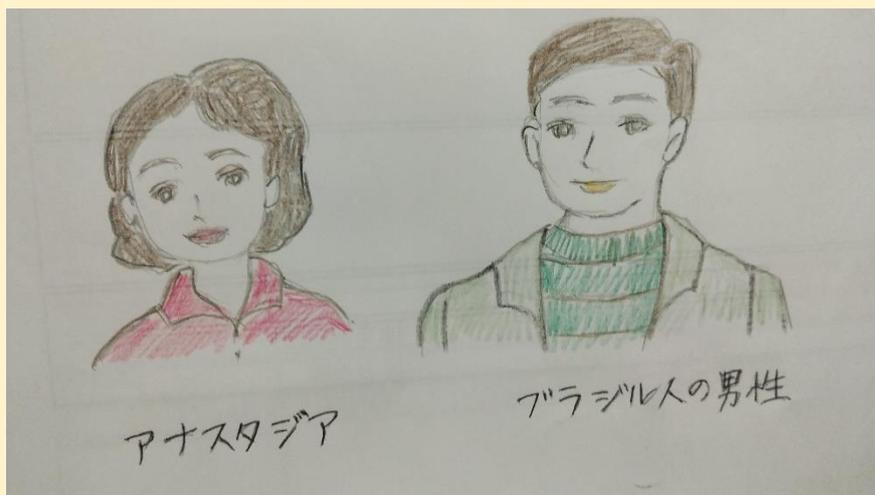
八時前にアルベルゲを出発しエステージャに向かう。これまでこの部分を大した距離でもないのにバスとかタクシーで、などと考えていたのは、以前歩いた時に道がわかりにくくてウロウロした記憶があったからである。しかし今日歩いてみたら全くそのようなことはなかった。ただひたすらに花咲く美しい野の小道を辿るばかりで記憶とは全く違って

た。迷いやすいところなどどこにもなく一時間ほどですんなりエステージャに着いた。前回はきっと間違えて途中から車道にでも入ってしまったのだろう。カミーノ用の道と車用の道はだいたい並行して走っているのだが重なるときもあり、かなり離れる時もある。

エステージャの街に入る少し手前から、ブラジルから来たという男性と一緒にになった。がっちりとした雰囲気、武骨な感じの人であったが話した感じでは若そうであった。二十代後半くらいに見えた。

彼もバスに乗るつもりらしかった。とても親切でいろいろ世話をやいてくれた。エステージャの街に入ってからバスの乗り場までは少しわかりにくくてどうやら少し行き過ぎてしまい、道行く人々に尋ねながら戻ったのだが彼は英語もスペイン語もよくできるので（母国語はポルトガル語であろう）通訳をしながら歩いてくれた。しかしスペイン語がペラペラというほどではなさそうで地元の人々との会話に時々手間取ることがあった。

バスターミナルに行く道の途中で、前日の朝マニェルーのアルベルゲで別れたスロベニアのアナスタジアとばったり出会い、もう帰るところなのよ、お別れだね、とハグをして別れた。



あまり似てないけど髪型と年恰好がこんな感じだったということで・・・

九時三十分頃バスターミナルに着く。件の男性はとても親切で、切符売り場の窓口でバスの時間や行き先を確認してくれたりトイレの場所を尋ねてくれたりした。そのくらい自分でできるよー、と思ったが…。トイレは隣接するバールの中にあった。

九時五十分、家にメールを送る。夫は私がちょっと予定変更をするととても心配する。遅れないように、遅れないようにと言ってくる。私はだいたいこういう旅に出発する際には夫に対してかなり大風呂敷を広げている。前回は今回も一日平均30km歩くつもりだと言った。しかしこれはもし出来るようだったら、ということである。ダメだったら適当に切り上げてバスや列車を使うという手がある。

ではなぜ初めからもっと余裕のあるプランにしないのかということ私の本音としてはハー

ドな方をやってのけたいからである。そもそも私はとても大きな（大それた）夢を持っている。しかしその夢を収納する大きなバッグは持っていない。

大概の日本人は夢を収納するために小さなポケットしか持っていない。だから小さなポケットの大きな夢を詰め込まなくてはならない。「小さなポケット」とか「夢が一つだけ」というのが美辞麗句になっているようなところがある。

日本人は自分のことは出来るだけ後回しにしてひたすら家族や周囲の人やお客のために働くべしという規範があり、でもそれだけではあまりに侘しいので一つくらい小さな夢を持ち、それを小さな灯のように掲げながら生きていこうというような雰囲気がある。小さい夢で満足しろよと言われていたような気がする。私のように何度も何度も海外に行きたいとか何十日も歩き続けたいとかいうのは一般的ではなくあまり褒められたことではないのだ。だからポケットは出来るだけ無理をして押し広げ沢山夢を詰め込まずにはいられない。

だから私はできるだけ家族の許可が下りやすいように日程は本当は四十日欲しいのに三十日だけ、とか言い、二週間欲しいのに十日だけとか少なめに申請する。それでも相手は「え〜、三十日も？」とか「十日も？」とか思っている。だから私は無謀かもしれないほどの予定をそこに詰め込む。でもこれは私にとって、楽しく生きるためのテクニックなのである。だって思い切りワクワクしながら出かける方が楽しいに決まっている。

エステージャからログローニョに向かうバスは10:50に出発の予定だったがその前に出発するバスが来るのが少し遅れたために十分あまり出発が遅れた。そしてログローニョには12:05に着いた。件のブラジルの男性は途中のロス・アルコスで降りた。日程にあまり余裕がなくて少しショートカットをしたようだ。

ログローニョのバスターミナルの建物は何かうらぶれていた。五十年前の上野駅の構内のような雰囲気だった。といってもそんなに広いわけではない。そこでトイレに行こうと思ったがそのトイレは有料だったのでやめてしまった。あまりきれいではないトイレを使用するのにお金を払わなければならないという状況にはとても馴染めない。

トイレはそのうちバールでも借りることにしてまずターミナルの周辺を探索する。翌朝早く鉄道を利用してマドリードに向かうことになっているのでまず駅の場所を確認しておかなくてはならない。ガイドブックに載っている簡単な地図だけでは不安で、事前にネットでマップを出して確認してみたのだがむしろ余計に判り難かった。距離的にそう遠いはずはないのもう当たって砕けろというか、現地に来てから足で探すことにした。するとわりとすんなり見つかった。家でネットでログローニョ駅の写真を見た時には何とまあモダンな、というか先鋭的なデザインの建物であることに驚いたがその映像そのままの姿で駅はそこにあった。

ホテルの確認はもう少し後でもいいので次は腹ごしらえである。バールに入りサンドイッチとコカ・コーラを頼む。3.6€。わりと都会的でおしゃれなサンドイッチだった。そこでトイレも借りた。

そのあとホテルの確認…、が、これまたあっさりと見つかった。方向を定めて周囲に目を

配りながら歩いていると最初に目に留まったHOTELの文字があった。とても小さい地味な建物だったのでまさかあれじゃないよね？と思った。旅行会社で予約してくれるのは三ツ星以上のホテルばかりなのだ。でも念のために近づいてみたらまさにそこであった。そのホテルは外見は地味だが中に入るとエレガントな高級ホテルの風情であった。

部屋に荷物を置いてから買い物に出た。すぐ近くにスーパーがあった。外国でちょっと町のスーパーに入ってみるのは楽しい。安いチーズや生ハムなど買いたくなってしまうものが沢山ある。しかし荷物になるし小さなパックだと思っても食べきるのは意外に大変なので買い物には慎重になる。

今晚と明朝の食糧として食べやすいものを慎重に選び、それからお土産をザクザクと買う。が、勿論持ちきれなくなるほどは買わない。私は帰路も荷物は全部機内持ち込みにするつもりである。羽田に到着後、荷物が出てくるのを待つのは時間のロスであり、耐えがたい。しかし買う作業はとても楽しい。

私はお土産探しはスーパーでやることに決めてしまった。安いし、物の種類が豊富で探しやすい。そこで念願のフィデウオも買った。スペイン特有の超細かいパスタで日本では売っていない。大きな輸入食料品店の「ナショナル麻布」まで行って見たがなかった。輸入されていないんじゃないか、ということだった。スーパーでの消費は18€36セントであった。

さてホテルに戻って買って来た缶入りレモネードを部屋で開けようとしたらプルタブが引きちぎれてしまった。それでその缶をフロントに持っていき、何とか開けてもらえないだろうかとお願した。するとそこにシェフらしい男性が通りかかり、ラウンジにあるバーカウンターのような所に入って錐と牛刀のような物々しい武器を用いてゴリゴリと開けてくれた。「鶏を割くにいずくんぞ…」という語句を思い出してしまった。が、牛刀のお陰なくしてはレモネードは飲めずじまいになるところであった。それにこういうものは手荷物で国外には持ち出せない。税関で没収されてしまうであろう。

部屋でまた残金の計算をした。374€99セントであった。

5月5日（土）

四時に起きる。ホテルのベッドは気持ち良かった。昨日の午後ホテルに入ってからずっと気ままに過ごしていた。テレビも見た。ハワイのキラウエア火山が噴火したことなどを知った。でもスマホを持っている人はそういうニュースはとっくに見ているんだろうな。

昨日買い物に出たのは三時から三時四十五分の間であるが帰ってすぐ、四時ごろにスーパーで買って来たミックスサンドと例のレモネードで食事をした。食パンにハム、チーズ、野菜を挟んで三角形にカットしたものであり日本では一般的な形のものであるがこれにヨーロッパで出会うことはめったにない。そして六時ごろに入浴し、八時ごろに洗面所のお湯

でもたまたま懲りずにインスタントラーメンを作ってみる。洗面所のお湯は調理に使えるほど熱くはないのだということをいい加減に学習し、納得すべきであろうとは思っているのだが。結果はまあ何とか食べられるかなという感じであったが半分だけ食べてあとは残しておいた。そして一晩たってみたらラーメンはいい具合にふやけていた。朝四時に起きた後、洗面所の湯でカフェラテを作り、それと一緒にラーメンの残りを食べた。ふやけてはいるが冷たいのでよく噛みながらゆっくり食べた。

いつも尾籠な話ばかりで恐縮だが日本にいる時のような便が出るようになってきた。巡礼の旅の初期はどうしても日本にいる時とはかなり違うものを食べることになる。バランスの良い食事に出会う機会に恵まれない日が三日くらい続く。手持ちの食品を先に食べてしまおうという気持ちもある。パールでトルティージャやディナーやサンドイッチにありつけるようになるのが三～四日目ぐらいからだが、そのあとも野菜らしい野菜に出会えない場合もある。しかし都会に近づいてくるにつれ食品の選択肢が増え、日本での食生活に近づけることができるようになってくるのである。

朝テレビをつけたら英語講座をやっているチャンネルがあった。講師数名の中に日本人らしい女性もいた。ハナと名乗っていた。スキットがなかなか面白かった。解説は勿論スペイン語だがほとんど英語で、それも易しい英語でやっているのでもわかりやすい。「ドブレ・ネガティーボ」というスペイン語が出てきて、「ああ、二重否定だな」と思った。No one…, Any one… というやつである。あと expect for…とか a couple of…などいろいろな用法を使い慣れるようにというレッスンをやっていた。

ログローニョ発マドリード行きの列車は7:35発なので7:10にはホテルを出たい。このホテルは朝食付きであったので、朝食は7:00からだと思ってダイニングルームが開くのを待っていた。ゆっくり食べているひまはないがパンの一つか二つくらいテイクアウトして行こうと目論んでいた。ところが七時を過ぎてもダイニングルームが開く気配がない。フロントに尋ねてみると朝食は7:30からだということであった。残念！それでは諦めざるをえない。でも前日にスーパーで買った菓子パンなどが残っていたのでそれでいいやということにした。



ログローニョ駅。とても現代的な建築。

ログローニョの駅に着くとあまり人がいなくて何だか異様な雰囲気である。別に何か変わったことがあるわけではなさそうだが、コンコースのようなところにいた駅員さんが私を乗車する客だと認識して「マドリッドまでか？」と聞いてホームに降りるエスカレーターまで案内してくれた。私の前にもスペイン人らしい二、三人連れの乗客がいたが、何だかヨーロッパで鉄道を利用するのは普通の列車に乗るのさえ日本の新幹線に乗るのよりも物々しいことのように感じる。しかし乗車してしまえば別にどうということはない。指定の車両や座席を探すのが大変で往生することはあるが。

ログローニョからマドリッドまでは三時間半ほどの予定だった。そして後半、何だか私の座席の少し後方に二十代くらいの男性グループが乗車してきた。かなり大勢、五、六人はいる感じだった。振り向いて確認したわけではないので正確な人数はわからない。そして彼らは乗車するなり大声で会話を始めた。それがまあ、ちょ～うるさかった。

しかも一度に何人もが同時にしゃべり続けてずっと切れ目がないのだ。普通会話というものは交互にやるものだろう。人の話に割って入る人は時々いるが、そんなものではない。全員が自分の喋りたいことだけを切れ目なく喋り続けている感じだ。あんなの見たことがない。どこの国の女子高生も小学生もオバちゃんたちの集団でもあんなワザはできないことだろう。

しかし周囲の人たちは何も言わない。注意したいのを我慢しているという感じではなくて全く気にならない様子なのである。そしてしまいには通路を挟んで私の右側にいた年配のご夫婦まで身体を後ろにひねって彼らとのおしゃべりに加わっていた！

列車は途中で停止信号みたいなことがあって二十分くらい到着が遅れた。しかしだれもそんなことは気にしていないようだったし遅れる理由を説明するアナウンスなどもなかった。そして列車は十一時過ぎにマドリッドの南部にあるアトーチャ駅に到着した。



二年前にサンティアゴ・デ・コンポステーラからマドリッドに列車で着いた時の駅は北部のチャマルティン駅だったのでこの駅は初めてである。アトーチャ駅は何というかとてもコンテンポラリーな建物だった。とても広くてわけがわからなくなってしまうような感じだった。そこでまずトイレを探した。しかしやっとたどり着いたら有料だったので利用する

のをやめた。何だか気に入らない。チャマルティン駅のトイレは無料だったぞ。仕方ない
もうしばらく我慢だ。



正確な場所は思い出せないがアトーチャ駅の周辺です。

私のこの後の予定としては、まず昼食をとり、プエルタ・デル・ソルの広場からそう遠くない所にある「どん底」という日本料理店に行くつもりであった。二年前にも行ったところである。味は最高級かどうかはわからないが不味いとは思わなかった。お刺身定食が18€で麦茶が2€というのも海外ならいたしかたない価格である。今晚泊まるホテルはチャマルティン駅と接続していてアトーチャ駅からは大部離れているがそのあたりからチャマルティン駅まで行くバスの乗り場もわかっていたから大丈夫だろうと考えた。

アトーチャ駅から「どん底」まではあまり距離がない。初めての道だったが歩いて行けそうだった。マドリードの市街図はしっかりと調べてあった。この道をこう行けば着くはずだと信じてはいたがマドリードの街は道路も建物も巨大であるため距離感がつかみにくいの
が不安だった。それでも道を間違えることはなく、ヘロニモ通り、アルカラ通りを経て無事
想定時間内に「どん底」にたどり着いた。

ところが「どん底」は閉まっていた。その店は日本料理店としては老舗で有名なようだが、他のエスニック料理店と同様に狭い路地裏にあり、閉まっているのが単に休みだからなのか、はたまた、たまたまその日はもっと遅い時間に開くものなのかわからない。大きな通りに店を構えているところならそういうことはわかりやすいだろう。大概何かの表示を出すだろうから。

私はスペインの旅の締めくくりここに寄るのをとても楽しみにしてきたので途方に
くれてしまった。こういう場合の他の選択肢を用意していなかった。そうはいってもいつまで
もそこに佇んでいるわけにはいかなかったので周囲をぐるぐる巡って他に適当な店はない
か探してみる。しかしどうも近くには入りやすい雰囲気のお店がない。インド料理やネパール
料理が嫌だというわけではないのだが、量が多かったらどうしようとかうんと辛かったら
どうしようとか心配してしまうのだ。それで私は路地裏巡りはやめて大通りに出た。そうす
ればスペイン・バルはいくらでもあるだろう。

プエルタ・デル・ソル近くのバルに入ってみた。田舎町のバルとは少し違うかな？と
いう気がした。内装がそう違うわけではないのだが黒人のイケてるお姉さんたちが働いて

いてどことなく都会的である。メニューの品数も多そうだった。私は無難なところでトルティージャとカフェ・コン・レチェを頼んだ。すると小料理屋の突き出しのようにポテトチップスとポン・デ・ケージョのような小さい揚げ菓子の小皿が出た。それからトルティージャ（これには大概パンもついてくる）。大きくて具が充実していた。量も十二分であったので全部は食べられずこっそり一部をテイクアウトした。

お値段は高かった。7€もした。地方の店の二倍くらいの価格である。でもまあ、内容が濃かったからな、もし「どん底」が開いていたら20€はかかるころだったからそれが三分の一で済んだと思えばいいか。トルティージャ、実はもういい加減、飽きてきていたんだけど・・・。

さてバス停でチャマルティン駅行き5番のバスを待つ。正確に何時に来るのかはわからないが大体二十分おきくらいには来るらしいのでそのうち来るだろうと思いながら待っている。ところが近くで何やら騒がしい。ドンドコ、ドンドコ太鼓を叩くような音や、時折大きな花火の音や銃声みたいな音まで聞こえる。そして何かプラカードのようなものを持って大勢の人が雑然たる行進をしている。付近には警察官らしい人たちもいる。あれは何だろう？デモだろうか？軍事パレードか？

すごく物々しい雰囲気なので不安になるが避難せよというような指示もないので危険なものではないのだろうと考える。しかし周囲に車がいなくなった。バスは止まってしまったのか？人通りはパラパラとある。しかし「あれは何なのか？」と通りすがりの人に尋ねるほどの語学力はない。ただひたすらバスを待つが、小一時間ほどたったころとうとう私はしびれを切らして歩き出した。バスではなく地下鉄という選択肢もあるとは思うのだが地下鉄については何だか不安で利用するつもりが全くなかったので詳しく調べていなかった。だから歩けるところまで歩き、途中からバスかタクシーを捕まえられたらいいなという感じだった。

しかも私はなんとチャマルティン駅までの地図を持っていなかった。マドリードの市街地図は旅行保険の会社で貰ったのが二枚あったのでそのうちの一枚の、今回必要と思われる部分だけを切り抜いて持っていたのである。アトーチャ駅、アルカラ通り、「どん底」、プエルタ・デル・ソルが入っている範囲である。他の部分はバスで移動するので不要、と思っていたしそのあたりからチャマルティン駅までは方角的には北に直進なのだが道路は複雑だし距離も10kmくらいあるし歩いて移動するつもりはそもそもなかったのだ。

しかし私は歩き始めてしまった。デモ？の騒ぎの場所から300mくらいしか離れていないのにプエルタ・デル・ソルのあたりは何事もなかったような雑踏。何しろ土曜日の昼過ぎである。渋谷原宿以上のごった返しぶりであった。広場の付近から枝分かれする道は何本もあるがそのそれぞれが幅のある大通りであり、そのすべてがホコ天状態である。車はその間を縫って遠慮がちに走っている。そしてホコ天大通りは何百メートルも続く。私はなるべく北の方にまっすぐ進んでいく。コンパスは持っていないが影の落ち方を見れば方角を定めるのは簡単だ。左手に影をキープしながら前進すればいいのである。

しかし一時間くらい歩くと行き止まりになった。どうしてそうなったのか後からよく調べてみると私は真北には進んでいなかった。道路に沿って歩くだけなので細かい軌道修正をするのが難しいのである。私はプリンセサ通りの西側を北北西に向かって歩いていてオエステ公園という広い緑地帯にぶつかってしまったというのが真相である。後から考えれば地下鉄二号線沿いのベルナルド通りに行くのが最も容量がよかったのだが……。これは「スペイン」のガイドブックを丸ごと持ってこなくてはわからないことであった。

もう疲れたのでバスかタクシーを捕まえたかったが、たまに見かけるタクシーは皆お客を乗せているし5番のバスは全く見かけない。困った……。周囲はもうホコ天状態ではなく人通りはあまりない。私はある大きな通りに面した大きな屋台のようなカフェに道を尋ねに行ってみた。

「英語でいいですか？」と問いかけると「え？困るなあ。」という顔のオジさんたち。でも必ず一人くらいは親切な人が出てきてくれるものだ。多分お客の一人の四十歳前後ぐらいの女性が「地下鉄に乗るといい」と言い、手取り足取りという感じで説明してくれた。

え～？地下鉄ってよくわからないしなるべくバスかタクシーの方がいいなあと思うのだがとてもそのようなワガママは言えない。その地下鉄の駅は200～300m行けばあるらしいので「ありがとうございます。行ってみます。」と言ってチャレンジするしかなかった。そして教えられたとおりに進み地下鉄駅に到着。でも「本当にここでいいの？」と思い、そこでまた通行人に確認。だって外国の地下鉄駅って日本のとはかなり感じが違う。でも入り口から階段を下りていくと確かに地下鉄駅だった。

私はまずそこで何をどうしたらいいかわからなかったのだが、外国ではこういう駅にはよく案内人のような駅員さんがいるので捕まえて尋ねる。その駅員さんは私を券売機のところに連れていき、切符を買う手伝いをしてくれた。

それを持ってまごつきながら改札を通る。しかしそのあとどのホームに行けばいいのかわからなくなりまた別の駅員さんに尋ねる。その駅員さんは地下鉄の路線図をくれた。それを示しながら説明してくれたのでようやく私は理解し始める。そして番号に従って乗車ホームまで行くが、万一反対行きだったら困るのでそこでまた乗客の一人の女性に「ここでまちがいないか？」と尋ねる。間違いないようなのでようやく安心。やってきた車両に乗り込み四駅目で乗り換えそこから六駅目のチャマルティン駅に無事に到着した。ここまで来れば大丈夫だ。ホテルは駅と直結しているのである。因みに私の乗車した地下鉄の駅はモンクローアというところだった。疲れた……。

ペットボトルに少し水を入れて持っていたのだがそれはもう既に飲みきっていた。何かジュースでも飲んで落ち着いたかったが駅構内の自販機の操作の方法がよくわからなかったのでジューススタンド(食べ物もある)に行き行ってスモ・デ・ナランハ(オレンジジュース)を頼んだ。3・45€もした！いくらこういうところは高いといたって……。メトロに10駅乗っても1・9€だったのに。

18:40、ホテルの部屋に入る。今晚はもうどこにも出かけたりしない。荷物を開いて

シャワーを浴びて洗濯をしてお決まりのタオルドライ。夕食は手持ちの食糧の片づけ。でも明日の朝食は違うぞ！前回食べ損ねたこのホテルの朝食を是非ともいただいて帰るんだから。あとはテレビを見たりして過ごす。時間はたっぷりありすぎだった。

5月6日（日）

五時起床。洗面所のお湯でカフェオレを作り、昨日残しておいたパンを食べる。ほんのちょっぴりなので昨日食べてしまってもよかったのだがそうすると早朝空腹で辛くなる。朝食はホテルのビュッフェで摂るつもりだがそれは七時からなのでそれまで何もナシでは持たない。

荷物、大分小さくなった。例えてみればびちびちだったスカートやズボンが楽に穿けるようになったくらい。アルファ米のご飯三食分とカロリーメイト二箱がなくなった結果である。快眠、快食、快便状態で洗濯物もバッチリ乾く、やっぱりホテルはよい。

七時、荷物を持って部屋を出てフロントに鍵を返してからビュッフェに行く。空港まで行くための時間が十分かどうか少々不安であったから。ところでこの朝も2チャンネルで英語講座をやっていた。結構長くて一時間以上やっていた。ギリギリまで見てから部屋を出る。

ホテル“**We are Chamartin**”の朝食ビュッフェは最高だった！二年前に来た時には食べるのを忘れて出てしまった。手持ちの食品を使い切ることで頭が一杯だったから。これからもスペインに来たら一度はここに泊って朝食を食べよう。

けどまだ七時を過ぎたばかりだったのに大勢押し寄せて来ていた他のお客さんたちはスペインの地方からのツアー客のように見えた。中高年の団体さんで皆スペイン語だったから。スペインにも農協ツアーってあるのかな？欧米人の方々は年を取っていても何となくカッコいいな、見た目の美醜の話ではなく雰囲気は田舎っぽくないなと思っていたのだが団体さんになるとやっぱり何だか農協ツアーのように見えてしまうのは何故だろう？



切望していたホテルの朝食だが結局このくらいしか食べられない。

さてチャマルティン駅からバラハス空港に向かい、搭乗するまでの手順である。二度目なのだがどうも前のことをはっきり覚えていなくてマゴマゴしてしまったので、今度はそん

なことのないようにメモをしておく。

【搭乗までの手順】

- ① チャマルティン駅の1番カウンターでチケットを購入。バラハス空港駅まで2.6€。
- ② 「10番ホーム」と言われるが「11番」から出ることもある。表示がわかりにくい。
- ③ 電車が来る直前になると「エアロポルト行き」と表示が出る。それまで不安でならないが、20～30分おきくらいに来るようなので大丈夫。同じホームに一人くらいは空港に向かう人がいると思うので手当たり次第に聞くとよい。
- ④ 電車は空港のT-4（テークワトロ）すなわち第4ターミナルに着くのでそこから空港内バスでT-2（テードス）に向かう。表示は比較的わかりやすいがわからなければ人に聞けばよい。
- ⑤ バスは「T-3（テートレス）」→「T-2」→「T-1（テージュノ）」の順の止まる。
- ⑥ ターミナルに着いたらタイムテーブルを確認し、チェックカウンター（荷物検査場がすぐに目に付くが、それより一階上のフロアにある。）を探し、どのカウンターに並ぶのかを確認する。
- ⑦ 今回「まず機械で発券」と言われてビビったが、日本語も出るので何とかなる。よほどモタモタしていると係員が手伝いに来てくれる。
- ⑧ チケットが手に入ったら下の階に戻って荷物検査。帽子、上着、靴は脱ぐ。食物は特にひっかからないが水物は勿論ダメ。果物などは持って通ったことがないのでわからない。危険物でなくても金属製品や棒のようなものが入っていると怪しまれるので出しておいたほうがよい。

11:35、かなりわかりにくかったが以上の手順を経てE-75の搭乗口から無事に搭乗。窓際の席だ！トイレに行くのは少し不便だがトイレはすぐ近くである。どうやら私は何度もエールフランスを利用しているのでスカイプリオリティというのになっているらしい。

12:20ごろようやくテイクオフ！私は飛行機の窓から外を眺めるのが好きだ。上空から見下ろす羊雲やフランスの畑のダークグリーンとライトグリーンと、黄色とダークピンクのパッチワーク模様……。ところで昼間のフライトでヨーロッパから日本に向かうとほとんど夜の暗さを体験せずに到着する。だからある程度の時刻になったら窓を閉めないで周囲に迷惑、と注意される。



マドリード～パリ間で出た軽食

二時間足らずで飛行機はパリ、シャルル・ド・ゴール空港に到着。来るときもそうだったが本当に CDG 空港ってわかりにくい。人に尋ねずにスイスイ行ける旅行者は誰もいない。

待合ロビーでどこの国の人かわからないが窓の傍で寝そべっている若い女の子が三人いる。では私が靴を脱いで椅子に座っていることくらいどうってことないな。でもこの時間帯のフライトっていいな。朝ホテルで朝食後、特に急がずに出発。→昼頃の第一フライト。→乗り換え。→夕方の第二フライト。→羽田に昼過ぎに到着。→夕方早い時間に帰宅。→やがて夜が来てちゃんと布団で寝られるということで。だから第二フライトが十二時間でも比較的気が楽である。

さてパリ発羽田行きの便は当然日本に帰国する人ばかりだろうと思っていたらそうではなくて驚いた。周囲を見回すと日本人は数えるほどしかいなくてほとんどが欧米人（多分フランス人だろう）ばかりである。それも見たところ皆日本に行けるのが嬉しくてワクワクしている様子。ツアーなのかもしれない。（羽田に着いた時、旅行会社の迎えらしい人が来ていた）へ～、日本も大したもんだなあ。ここまでヨーロッパ人にとっての「憧れの国」になったんだ！！因みに日本からパリに向かった時の乗客はというと日本人は半分くらいであっただろうか。あとは外国人、欧米人は勿論、アジア、アフリカ系の人たちもいた。パリの CDG はハブ空港だからいろいろな国の人が利用する。だから当然だな、とその時は思っただけだったが・・・、

ところで今回の旅では韓国人の方をあまり見かけなかった。勿論パリより向こうで、のことだが日本人よりは数が多い。しかし二年前よりは二、三割少なくなっているような気がした。少し前にテレビで、韓国から日本への観光客が減少していると聞いたような気がするがそのことと関係あるのだろうか？韓国語、以前よりもっと喋れるようになって行ったのにあまり使う機会がなくて残念だった。

羽田に到着したのは5月7日（月）の午後零時十分ごろである。大宮まで帰るのにバスを当たってみたが時間的にちょうどいいのがなかったのでモノレールと京浜東北線を用いて三時に帰宅した。

雨が降り出したがすぐに写真をプリントに出したい。昼食をとるひまがなかったのでお腹が空いていたがブタめん一個だけ食べてイオンへ。写真ができるのは五時と聞き、マックで待とうと思ってポテトとシェイクを注文したりするが四時過ぎ、寒すぎて挫折、家を出る時寒いのか暑いのかよくわからなくて薄着で来てしまったのである。一度家に帰り、五時ごろもう一度出かけて写真を持ち帰る。

夜はカレーライスを作る。飛行機疲れがはなはだしく、写真を袋から出してみる気もせず、九時半ごろに寝る。

【完】